フィリピン・コルディリェーラ山脈の棚田と遺産ツーリズムの課題

── 世界文化遺産としての文化的景観と地域社会 ──

野　間　晴　雄

Rice Terraces of the Philippine Cordilleras and Some Issues on Heritage Tourism

：Cultural Landscape as World Cultural Heritage and Ifugao Communities

NOMA Haruo

This paper sets out to discuss some urgent issues on heritage tourism, which comprises one kind of the alternative tourisms, and to investigate the rice terraces of the Phillipine Cordilleras in Northern Luzon, the Philippines, in term of cultural landscape and Ifugao community's changes.

In the first chapter, I describe the aim of this study and the background of emerging alternative tourisms. Secondly, I explore the concept of "cultural landscape" in UNESCO's world heritage list and the Agency for Cultural Affairs in Japan. In the third chapter, I make a brief survey on three of the Philippines' cultural heritages: Baroque Churches of the Philippines, Historic Town of Vigan, and Rice Terraces of the Philippine Cordilleras. In the fourth chapter, I give some characteristic features of rice terraces of Banaue municipality, the Cordilleras Administrative Region, in the context of Ifugao community. Lastly, I allude to some critical issues on heritage tourism in these eight points; 1) authenticity on landscape, 2) the workforce shortage of rice terrace, 3) hotels and infrastructures, 4) farmers' cash income sources, 5) road conditions, 6) environmental education views and its practices, 7) appropriate land-use planning, 8) criticism on eco-

tourism.

To sum up the major points, last thirty years of socio-economic changes, environmental degradation and political situations of Ifugao society have brought about indifference to farmer's attitude and the related rites and customs of rice terrace management. Concurrently, since the latter half of 1980s, after the adoption of world heritage in 1995 in particular, influence of tourism has drastically changed the Ifugao traditional way of life. They cannot return to the former lifestyle. Shortage of labor forces on rice terraces will desolate rice-field. Small business of wood curving and handicraft making have brought some cash income to villagers. Illegal or disorder forest logging, forest vegetation cover that induce watershed conservation, affect the environment degradation as well. We should seek the second best way in such contemporary situations.

1．はじめに

グローバル化や交通・通信技術の発達、経済成長は20世紀の後半世紀に劇的な観光客数の増加と観光となる地域の拡大をもたらした。世界観光機関（WTO）によると、テロ行為、自然災害、健康への脅威、原油価格の高騰、為替レートの変動、不安定な政治経済状況にもかかわらず、2005年の全世界の国際観光客到着数は、大方の予想を裏切り８億人を超え、史上最高を記録した[1)]。1950年が2500万人であったから、55年間で32倍となった計算である。

しかしこの国際観光客数の絶対数増加の背景には観光産業の質的な転換が内包されている。その質的転換の象徴がオルタナティブ・ツーリズム、“第三の観光”の出現である。団体による周遊型パッケージ旅行としてのマスツーリズムの対蹠にある新たな観光の形態であるオルタナティブ・ツーリズムの小規模な形態は、1970年代後半に東南アジアなどで見られた。しかしその本格的展開は80年代以降で、ツーリストの多様かつ分散的、高度な欲求と相まって、先進国・発展途上国にかかわらず、さまざまなタイプのオルタナタィブ・ツーリズムが生まれてきた（石原ほか 2000）。その経済的効果の総量は無視できる数字ではない。

しかし、観光人類学におけるホスト・ゲスト論の教えるところは、ゲスト＝観光客とホスト＝国家、観光関連業者、コミュニティ住民の間の関係は、有産者（haves）と無産者（have-nots）が真実であり、とりわけ発展途上国ではその懸隔がはなはだ大きく、ホストの経済格差が再生産されていくこと、ホスト側がうける文化変容がゲスト側よりもはるかに大きいという教訓で

ある（ゼロン・ヌーネッツ 1991：367-380）。

オルタナティブ・ツーリズムの用語に対してはさまざまな定義が試みられてきた。最大公約数的な定義としては、1970年代終わりから80年代に出現した、新しいライフスタイル、人びとが心のふれあいや癒し・安定を求め始めたことに対応した、分散的で適正規模の自然や歴史を学んだり、地域の住民との接触や体験をしたりする、現存するコミュニティや生活様式と密接に関連している、質を重視した小規模なツーリズムの総称であるといえよう。

その発祥はヨーロッパ･先進国起源のものと発展途上国起源の２つの異なる類型が存在する。ヨーロッパ起源のものは、ドイツ語圏アルプス地域でのザンフター・ツーリズム（Sanfter-tourismus）、英語ではソフト・ツーリズム（soft tourism）と訳す類型である。EU諸国での地域住民の視点を重視したローカルレベルのツーリズムであり、グリーンツーリズムやファームツーリズムと同義に用いられることが多い。農村・農業を資源として、膨大な農業補助金を捨て金として投入してこそ成り立つ副業、収入補填の家内制レベルの産業（宗田 1997：75）という位置づけは、日本やEU諸国では正鵠を得ている。このような隙間産業、ニッチ産業は、ひとつひとつの経済効果は大きくはないが、受益者の満足度を得て持続的な発展をするためにきめ細かな管理が必要となる。しかし、近年の上流階層・高学歴者の趣味の多様化により、医学的な根拠に基づく健康回復や維持・増進につながる温泉療法や森林療法、海岸療法（タラソテラピー）などのヘルス・ツーリズム（health tourism）、人間の健康福祉向上を目指すウエルネス・ツーリズム（wellness tourism）なども先進国発の類型である。このほか、最近では映画で上映された地点を巡るフィルム･ツーリズムや留学ツアーなどの教育観光をはじめとして、多様な観光形態が生まれてきており、地域振興[2)] に一役買っているケースも少なくない。

ヨーロッパのオルタナティブ・ツーリズムでは「グリーン＝環境に優しい」という付加価値が強調されるが、その要因を1980年代の環境主義の高まりからのみ解釈するのは一面的な見方である。ツーリズムがEU諸国では1930年代に大衆に普及していた成熟した土壌と長いツーリズムの歴史があることも見逃してはならない。

それに対して、生態系の維持と保護を意識し、地域社会の発展への貢献や環境教育を重視するエコツーリズム（eco-tourism）、民族集団固有の文化と結びついた象徴行為や認識の体系を意味する「エスニシティ」を観光の対象とするエスニック・ツーリズム（ethnic tourism）、珍しい動物や植物を触れるネイチャーツアーなどは、訪問者と居住する環境と異なる差違が重視され、発展途上国の山岳地帯、熱帯、海岸リゾート、離島などが舞台となることが多い。エコツーリズムといっても自然保護団体の定義では自然保護・環境教育に重点が置かれるが、観光団体の定義では環境との調和を重視した自然観光に力点があり、グリーンツーリズムと近い考

え方もあるなど、先進国・欧米型への乗り入れもみられる。

環境への配慮や開発抑制を重視すれば、これらは持続可能な観光（sustainable tourism）、適正観光（appropriate tourism）、責任ある観光（responsible tourism）ともいえるが、すべてがマスツーリズムの反面教師として望ましい面のみを具備しているのではない。

バトラーは、オルタナティブな小規模ツーリズムはマスツーリズムに代替できるが、その逆は真ではない、すなわち、観光開発過程の片方向性を主張している。オルタナティブ・ツーリズムの存在意義は、マスツーリズムの引き起こした諸問題を改良するための現実的な試みを助けることにあるとする（Butler 1992：44；石原ほか 2000： 3）。

近年、オルタナティブ・ツーリズムのひとつとして、遺産（ヘリテージ）ツーリズムという言葉が用いられる。地域の遺跡や歴史をもった文化遺産を訪ねる観光であり、都市の産業遺産なども含まれるが、実質は世界遺産をじっくり訪問し、遺跡や歴史などの文化遺産について理解を深めることが核となっており（根木ほか 1999）、日本の観光業界では世界遺産観光とほとんど同義に用いられることも多い。遺産とは本質的に場所依存的な運動であり（ジョンソン 2005：306-307）、遺産ツーリズムとは、遺産をめぐる文化の集合的過去を、現在という時点で歴史的・地理的想像力で固定する作業にほかならない。

なお、本稿で扱う棚田地域はイフガオ族といわれるフィリピンの山岳少数民族の居住地域であり、エスニック・ツーリズムの色彩も帯びているが、見事な棚田景観の視角要素が前面に出てきているため、ここでは発展途上国の遺産ツーリズムの一つの事例とした。

世界遺産は1972年に開催された第17回ユネスコ総会で、世界の文化遺産および自然遺産の保護に関する条約（世界遺産条約）で成立した物件である。当初20ヶ国が条約締結して1975年に正式発効し、1978年に最初の12件が登録された。この世界遺産をめぐる圧倒的なネームバリューによって、多くの登録物件はグローバルな観光化の渦中にある。ユネスコ（UNESCO）を主導するフランスが音頭をとったこともあり、登録遺産にヨーロッパ偏重が現在も指摘できる。しかし、交通が不便な地域の物件も数多く指定され、これまで一部の人にしか知られなかった地域に大挙して観光客が訪れるという現象も世界中で生じてきている。元来は富裕層・シニア層の高付加価値の個人旅行であった遺産観光が、バックパッカー[3] といわれる若者の長期周遊／滞在型のツアーにも取り込まれていき、マスツーリズムの様相も呈してきている。東南アジアではその代表がアンコールワットである。基地となるシュムリアプにはこの10年、リゾートタイプの外資系高級ホテルからバックパッカー用の安宿までさまざまな設備が雨後の竹の子のように出現してきた。カンボジアの首都プノンペンを経由せずに第三国からの観光客がアンコールワットを訪問するようになった。

日本でも、欧米先進諸国でも中高年の富裕層やリタイアした層をターゲットにした世界各地の世界遺産巡りが大手・専門旅行社から企画販売され、世界遺産に関する写真集、書物、マスメディアの情報が世界中に氾濫していると言って過言でない。エキゾチックな世界一級の文化遺産の映像が衆人の目に毎日のように触れることができる情報グローバル化社会のなかで、資本や国家の支援が十分でないアジアの多くの世界遺産をもつ地域の抱える問題は何であろうか。

この小稿では1995年に世界文化遺産に登録されたフィリピン・ルソン島北部の「コルディリェーラ山地の棚田群」を対象に、その世界遺産の現状とツーリズムの特色・課題を概観することを目的とする。この世界遺産はアンコールワットやインドのタージマハールのような歴史上著名な文化遺産ではない。「文化的景観」という世界文化遺産の選定基準に最初はなかった基準が大きく効いて指定を受けた。ローマの円形劇場を彷彿とさせ、“天国へ昇る階段”と比喩される見事な棚田がルソン島の山間部に展開する。しかもその造成者はフィリピンの主要民族であるマレー系のタガログ人ではなく、中央山脈（スペイン語でコルディリェーラ）に住むプロト・マレー系のイフガオ族[4] である。

棚田の総延長は20,000kmを越えるとも言われているが、山地全体に分布しているわけではない。特定の地形・地質の場所に集中する。また、近年は人口の流出や棚田管理の不徹底、耕作放棄田の増加、水の流れを無視した住居の建築、自然災害による破壊などで景観の維持が喫緊の課題となっているとして、2001年に危機遺産にも登録された。現在、ユネスコの財政的・技術的支援の下に、フィリピン政府は世界遺産登録地域の正確な地図の作成と管理計画の策定を行い、地域共同体への支援を開始している。筆者は2006年と2007年の２回、短期に現地を訪問し、いくつかの関係者にインタビューし、バナウエ地区の３カ所の世界遺産に指定されている棚田を見学した。そのレポートが本稿である。

構成は次のとおりである。次章の２で文化的景観という概念が世界遺産に採用された背景もふまえて、その特色を世界の文化的景観の指定リストから概観する。３ではフィリピンの世界文化遺産を概観して、コルディリェーラ山脈の棚田群の特色や世界遺産に取り組む政府の姿勢を浮かび上がらせる。４ではこの棚田群の中心であるバナウエでの短期の見聞をまじえながら、この棚田群の構造・技術上の特色、イフガオ族の農業体系や社会の特色、儀礼などを解説する。５ではバナウエを中心としたイフガオ族の地域社会が遺産ツーリズムにどの程度包摂され文化変容してきたのか、その課題を含めて考察する。

付記にも記した本稿の成立事情から推察できるように、この小考は本格的なフィールドワークの成果ではなく、この世界文化遺産の現状の紹介や文化的景観としての棚田の位置づけに関

わる問題点などを、日本の棚田やグリーンツーリズムなども視野に入れながら概観した解説的論考であり、参与観察によるゲスト―ホストの関係などの分析は今後の課題とすることをお断りしておきたい。

2．文化的景観の概念と世界遺産

(1) ユネスコによる文化的景観

ユネスコ＝国連教育科学文化機構は文化的景観を以下のように定義する（1992年）。

「自然と文化の共同作品とも言えるもので、長期にわたる人類文化の進化・発展を示すもので、農村・牧草地や、庭園・公園、劇的な自然景観に配された文化遺産または複合遺産」。したがって、この範疇には自然遺産は含まれない。具体的な要件として次の３種類の景観類型をあげている。表１は2007年３月現在の世界遺産登録リスト830件のうちから、文化的景観に関わる54件すべてを地域別に列挙したものである。ここで用いた資料は、ユネスコの公式ホームページ等をもとに筆者が作成した独自のデータベースと、『世界遺産なるほど地図帳』（講談社2007：57）に掲載された文化的景観のリストである。

最初の文化的景観の指定は1993年のニュージーランドの火山麓のマオリ先住民集落であり、その次が翌1994年のオーストラリアの先住民アボリジニが聖地とした「ウルル、カタ・ジュタ国立公園」である。後者のうち、最も人口に膾炙しているのはエアーズロックといわれる巨大な砂岩の一枚岩である。その周辺の36の巨石群と一体となって信仰の対象としての聖地が指定を受けた。オセアニアの２つの文化的景観はいずれも新大陸の自然的な諸力の勝っている地域での指定である。当初は自然遺産として登録された後に、文化遺産が加わって複合遺産となった。この２つの複合遺産から最初の文化的景観が選ばれたことは示唆的である。コルディリェーラ棚田群は文化的景観基準制定３年目の1995年に指定を受けた。文化的景観としては初めての農業景観である。

これ以降、地中海地方やハンガリー、ドイツなどのブトウやオリーブ、ワイン醸造などヨーロッパの農業景観は文化的景観として多くの指定を受けるが、それ以外の作物としては、タバコ（キューバの「ビニャーレス渓谷」、15世紀以降）、コーヒー（キューバの「キューバ南東部」、19～20世紀）、リュウゼツランとそれを材料にして醸造するテキーラ（メキシコの「リュウゼツラン景観とテキーラ産業遺跡群」、16～20世紀）しかない。つまり、ヨーロッパの果樹を代表するブドウや、プランテーション作物として新大陸に導入されたタバコ・コーヒーなどの商品作物が中心である。在来の主食作物としては、フィリピンの棚田稲作が１例のみである。ここでも、地中海ヨーロッパで卓越するブドウやオリーブとその伝播先であるアルプス以北の箱

表1　文化的景観を選定基準とした世界遺産一覧

国　名	年	世界遺産名称	種別	基準
アジア　10				
日本	04	①紀伊山地の霊場と参詣道	C	ii・iii・iv・vi
モンゴル	04	②オルホン渓谷文化的景観	C	ii・iii・iv
フィリピン	95	③フィリピン・コルディリェーラ山脈の棚田群	C	iii・iv・v
ラオス	01	④チャンパサクの文化的景観にあるワット・プーと関連古代遺産群	C	iii・iv・vi
インド	03	⑤ビンベットカのロック・シェルター群	C	iii・v
アフガニスタン	03	⑥バーミヤン渓谷の文化的景観と古代遺跡群	C	i・ii・iii・iv・vi
イラン	04	⑦バムとその文化的景観	C	ii・iii・iv・v
カザフスタン	04	⑧タムガリの考古的景観にある岩絵群	C	iii
イスラエル	05	⑨香料の道−ネゲヴの砂漠都市	C	iii・v
レバノン	98	⑩カディーシャ渓谷（聖なる谷）と神のスギの森（ホルシュ・アルツ・エルラブ）	C	iii・iv
アフリカ　6				
ナイジェリア	99	⑪スクルの文化的景観	C	iii・v・vi
ナイジェリア	05	⑫オシュン−オショグボの聖木立	C	ii・iii・vi
マダガスカル	01	⑬アンブヒマンガの丘の王領地	C	iii・iv・vi
ジンバブエ	03	⑭マホドの丘群	C	iii・v・vi
南アフリカ	03	⑮マプングブエの文化的景観	C	ii・iii・iv・v
トーゴ	04	⑯クタマク，バタマリバ人の土地	C	v・vi
ヨーロッパ　32				
イタリア	97	⑰アマルフィ海岸	C	ii・iv・v
イタリア	04	⑱オルチア渓谷	C	iv・vi
イタリア	03	⑲ピエモンテとロンバルディアのサクリ・モンティ	C	ii・iv
イタリア	97	⑳ポルトヴェネーレ，チンクエ・テッレ及び小島群	C	ii・iv・v
イタリア	98	㉑チレント・ディアノ渓谷国立公園及び遺跡群と修道院	C	iii・iv
スペイン	01	㉒アランフェスの文化的景観	C	ii・iv
スペイン、フランス	97	㉓ベルディド山周辺のピレネー山脈	M	iii・iv・v・vii・viii
ポルトガル	01	㉔アルト・ドウロ・ワイン生産地域	C	iii・iv・v
ポルトガル	04	㉕ピーコ島のブドウ園文化の景観	C	iii・v
ポルトガル	95	㉖シントラの文化的景観	C	ii・iv・v
英国	03	㉗キュー王立植物園	C	ii・iii・iv
英国	06	㉘コーンウォールとウェストデヴォンの鉱山景観	C	ii・iii・iv
英国	00	㉙ブレナヴォン産業用地	C	iii・iv
英国	05	㉚セント・キルダ諸島（86 自然遺産、04 範囲拡大、05 文化遺産）	M	iii・v・vii・ix・x
アイスランド	04	㉛シングヴェトリル国立公園	C	iii・vi
ノルウェー	04	㉜ヴェガオヤン−ヴェガ群島	C	v
スウェーデン	00	㉝エーランド島南部の農業景観	C	iv・v
フランス	99	㉞サン・テミリオン地域	C	iii・iv
フランス	00	㉟ロワール渓谷	C	i・ii・iv
アンドラ	04	㊱マデリウ−ペラフィタ−クラーロル渓谷	C	v
ドイツ	00	㊲デッサウ・ヴェルリッツの王宮庭園	C	ii・iv
ドイツ	02	㊳ライン渓谷中流上部	C	ii・iv・v
ドイツ	04	㊴ドレスデン・エルベ渓谷	C	ii・iii・iv・v
ドイツ、ポーランド	04	㊵ムスカウアー公園／ムジャコフスキ公園	C	i・iv
ポーランド	98	㊶カルバリア・ゼブジドフスカ景観複合体と巡礼公園	C	ii・iv
オーストリア	97	㊷ハルシュタット−ダッハシュタイン・ザルツカンマーグートの文化的景観	C	iii・iv
オーストリア、ハンガリー	01	㊸フェルテー湖／ノイジードラー湖の文化的景観	C	v
オーストリア	00	㊹ヴァッハウ渓谷の文化的景観	C	ii・iv
ハンガリー	02	㊺トカイ地方のワイン産地の歴史的文化的景観	C	iii・v
ハンガリー	99	㊻ホルトバージ国立公園−プスタ	C	iv・v
チェコ	96	㊼レドニツェ−ヴァルティツェの文化的景観	C	i・ii・iv
リトアニア、ロシア	00	㊽クルシュー砂州	C	v
オセアニア　2				
オーストラリア	94	㊾ウルルーカタ・ジュタ国立公園（87 自然遺産）	M	v・vi・vii・ix
ニュージーランド	93	㊿トンガリロ国立公園（90 自然遺産）	M	vi・vii・viii
南北アメリカ　4				
キューバ	00	(51)キューバ南東部のコーヒー農園発祥地の景観	C	iii・iv
キューバ	99	(52)ビニャーレス渓谷	C	iv
メキシコ	06	(53)リュウゼツラン景観と古代テキーラ産業施設群	C	ii・iv・v・vi
アルゼンチン	03	(54)ケブラーダ・デ・ウマワーカ	C	ii・iv・v

種別　C：文化遺産　M：複合遺産。年は05は2005年、94は1994年を意味する。
選定基準：選定基準は以下の基準を参照のこと。ローマ数字は表に対応する。
(i)　人類の創造的天才の傑作を表現するもの。
(ii)　ある期間、あるいは世界のある文化圏において、建築物、技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展における人類の価値の重要な交流を示していること。
(iii)　現存する、あるいはすでに消滅した文化的伝統や文明に関する独特な、あるいは稀な証拠を示していること。
(iv)　人類の歴史の重要な段階を物語る建築様式、あるいは建築的または技術的な集合体または景観に関する優れた見本であること。
(v)　特に不可逆的な変化の中で存続が危ぶまれている、ある文化（または複数の文化）を代表する伝統的集落または土地利用の際立った例。
(vi)　顕著で普遍的な価値をもつ出来事、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接または明白な関連があること（ただし、この基準は他の基準とあわせて用いられることが望ましい）。
(vii)　ひときわすぐれた自然美及び美的な重要性をもつ最高の自然現象または地域を含むもの。
(viii)　地球の歴史上の主要な段階を示す顕著な見本であるもの。これには生物の記録、地形の発達における重要な地学的進行過程、重要な地形的特性、自然地理的特性などが含まれる。
(ix)　陸上、淡水、沿岸および海洋生態系と動植物群集の進化と発達において進行しつつある重要な生態学的、生物学的プロセスを示す顕著な見本であるもの。
(x)　生物多様性の本来的保全にとって、もっとも重要かつ意義深い自然生息地を含んでいるもの。これには科学上または保全上の観点から、すぐれて普遍的価値を持つ絶滅の恐れのある種の生息地などが含まれる。

庭的な景観に文化的景観の指定が偏重していることが指摘できる。

地域別にも、アジア10（19%）、アフリカ６（11%）、ヨーロッパ32（59%）、オセアニア２、南北アメリカ４と世界遺産全体の地域別比率と同じようにヨーロッパ偏重が指摘できる。

この文化的景観には次の３つの範疇がある。

１．人類によって故意に意匠・創造されたことが明らかな景観（designed landscape）であること。

２．有機的に進化し続ける景観であること（evolved landscape）。

３．関連する文化的景観であること（associative landscape）。

このうち、「意匠された景観」は人間によって創り上げられデザインされた極めて人工的な景観である庭園や公園が対象となる シントラの文化的景観［ポルトガル：1995年］、アランフェスの文化的景観［スペイン：2001年］などがその例であり、初期登録の文化的景観に多い。

上の２の有機的に進化する景観は、（ｉ）継続する景観（continuing landscape）と（ii）遺跡の周囲に残る残存文化的景観（relict cultural landscape）に区分される。

このうち前者の「継続する景観」は農林水産業などに関連する景観や遺跡が核になり、これらと一体となって重要な景観をなすもの（棚田等農耕・再生景観等）で、わが国の文化的景観保護制度に最も大きな影響を与えたと考えられる。その例として、フィリピンのコルディリェーラ山脈の棚田［フィリピン：1995年］、サン・テミリオン地域［フランス：1999年］などが該当する。本来、恒久的な建築物に重きを置いた指定のスタンスからみると、景観としては毎年の季節のサイクルに合わせて更新される可変的な文化遺産であることに特徴をもつ。

後者の残存文化的景観は遺跡などの記念物と一体となって重要な要素を成す景観である。その例として、ワット・プーと附属するチャンパサクの古代集落の文化的景観［ラオス：1999年］や、ロペ・オカンダの生態系と残存文化的景観［ガボン：2007年度新規］がある。ワット・プーはクメール文化の遺影を一遺跡だけでなく、周辺の集落を含めた空間が残存景観として登録された。ロペ・オカンダは熱帯雨林と残存サバンナの自然景観であるが、後氷期の気候変化に生態システムが対応し、バンツー民族などが西アフリカからコンゴ盆地へ移動していった痕跡としての人類遺跡などを対象としたもので、長い人類史のスパンを考慮に入れたものである。

なお表１には掲載していないが、2007年10月に世界遺産登録された日本の世界遺産「石見銀山跡とその周辺の文化的景観」は、文化的景観のうち、有機的に進化する景観に位置づけられる。「採掘から精錬に至る鉱山の遺跡、街道、港など、石見銀山遺跡において価値を損じることなく遺存してきた銀の鉱山経営に関わる豊富な痕跡は、今やその広い範囲が再び山林の景観に覆われてしまった。その結果、「残存する景観（relict landscape）」は銀生産に関わって長く

人々が生活してきた集落などの「継続する景観（continuing landscape）」の地域を含み、顕著な普遍的価値を持つ歴史的土地利用の在り方を劇的に証明している」と文化庁の公式推薦書にあるように、銀生産自体は16世紀を全盛として、20世紀前半まで採掘された「残存文化的景観」としながらも、現在も集落が営まれる周辺地域を含む意図をもって、「継続する景観」としての側面も強調している（野間 2007：125-126）。２つの範疇を同時に取り込んで指定に漕ぎ着けたところが目新しい。

３の関連する景観とは、自然の要素が宗教的、芸術的、文化的な意味と結び付けられる＝関連づけられることにより創り出される景観で、１や２の類型よりも自然的な要素が強く、畏怖や神聖性をもったものが選択される傾向が指摘できる。2004年に日本の「文化的景観」第１号として世界遺産登録された三重県・和歌山県・奈良県に及ぶ「紀伊山地の霊場と参詣道（吉野・大峯、熊野三山、高野山の霊場と参詣道）」がこの例である。指定を受けた2004年には景観緑三法が制定され、景観計画指定地区の中に文化的景観を定め、その価値を証明することで、保全管理のための規制措置あるいは保存的活用等が可能となった。その後、文化庁が中心となって各地の文化的景観を選定する契機ともなる。

(2) 文化庁の文化的景観

文化庁文化財部記念物課が主担官庁となり、農林水産業に関連する文化的景観の保存・整備・活用に関する検討委員会[5]は、農林水産業に関連する文化的景観の保護に関する調査研究（報告）を2003年６月12日に提出した。文化庁の文化的景観の定義は「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」（文化財保護法第２条第１項第５号，2005年）、つまり生活・生業を営んでいく中で結果として形成された景観地を保護対象で、180件が第一次指定を受けた。名勝地のような著名なものではなく、地域において重要なことが要件となっている。有形文化財、無形文化財、民俗文化財、記念物、伝統的建造物群という旧来の５つの範疇に文化財保護法成立（1954）以来50年ぶりに加わったまったく新しい文化財保護の概念でもある。

具体的には以下の８つが選定基準となっている。

(1) 水田・畑地などの農耕に関する景観地
(2) 茅野・牧野などの採草・放牧に関する景観地
(3) 用材林・防災林などの森林の利用に関する景観地
(4) 養殖いかだ・海苔ひびなどの漁ろうに関する景観地
(5) ため池・水路・港などの水の利用に関する景観地

(6) 鉱山・採石場・工場群などの採掘・製造に関する景観地

(7) 道・広場などの流通・往来に関する景観地

(8) 垣根・屋敷林などの居住に関する景観地

そのうちから特に重要な景観として、2006年には近江八幡の水郷（滋賀県近江八幡市）、一関市本寺の農村景観（岩手県一関市）の２件が重要文化的景観（important cultural landscape）に指定された。

選択基準を見ると、これまで歴史地理学が扱ってきた景観要素がほぼ網羅されているが（金田 2006）、世界遺産の文化的景観の指定に比べて、より生活に密着した匿名性が高い。後者は著名な中世の陸奥国骨寺（ほねでら）村絵図と現地照合が可能である現在性が指定の大きな根拠となった。近年建築史や土木史の分野で注目されている産業遺産、とりわけ近代化遺産は選択基準の(6)で一部触れてられているが、ルーラルなものが中心であることは否定できない。この指定に農林水産省、国土交通省の意向が強く反映されていることの反映でもある。

ユネスコ、文化庁いずれの文化的景観のなかで、階段耕作は一般にもわかりやすい事例としてとりあげられている。稲作の風土性と相まって、フィリピンのコルディリェーラ棚田群は欧米系の人々にもわかりやすい対象である。しかし当事者にとっては、とりわけ日本の棚田や階段畑は、農作業労働の困苦がつきまとう疎ましい存在として、過疎化・高齢化する農耕の不利地・限界地として存在していた。それが近年、上述したオルタナティブ・ツーリズムや環境保全の意義、審美的価値が見直されてきて、外部者、とりわけ、都市住民によって懐かしい風景として再評価され、アメニティの側面からも脚光を浴びてきているところに特色がある。また、一部には棚田オーナー制の導入などによって、都市―農村交流を恒常的に行って不耕作地の解消に努めているところもある。全体としては、機械化が出来ない非効率性を考えると、きわめて厳しい現実にあるのも確かである。

そのような日本の現実を一方に置いて、フィリピンの棚田をみると、家屋で伝統的形態の改変がみられるものの、一見しただけでは棚田自体の管理は日本よりも十分になされている。しかも集約的で、商品作物や水産物も生産する多機能型水田の様相が保持されていること、精緻な畦塗りや壁面造成作業や水利システムに筆者はたいへん感銘を受けた。フィリピンでは何がこの棚田景観を維持させきたのだろうか。比較の視点も含めて、以下の考察をしていきたい。

3．フィリピンの世界文化遺産

フィリピンには世界遺産が現在（2007年）５件ある（表２・図１）。アジアの世界遺産の登録件数は167で、全遺産数の20％を占めるに過ぎない。ヨーロッパが387件、比率で47％と圧倒

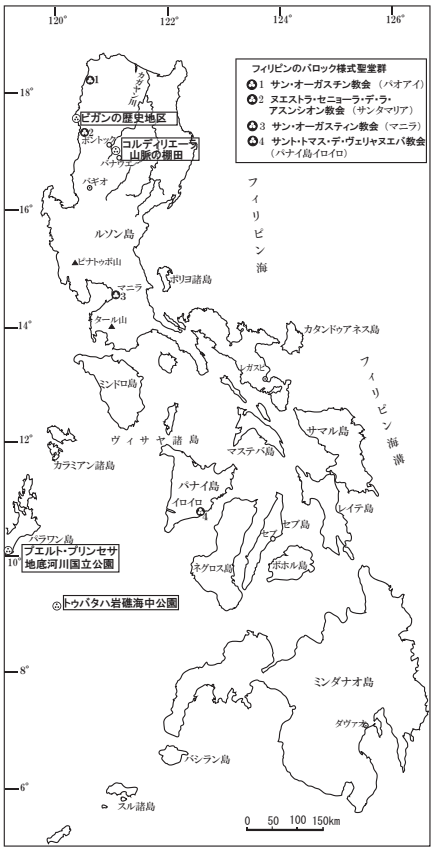

図１　フィリピンの５つの世界遺産

的な数を占めるのとは大きな懸隔がある。自然遺産のトゥバタハ岩礁海中公園（1993年）は一海域として世界最大級の生物種を誇る。プエルト・プリンセサ地底河川国立公園（1999年）はパラワン島の海につながった洞窟あり、独自の生態系・生物多様性や自然美が対象となった。それらを除くと、あとの３つの世界遺産はいずれも文化遺産である。以下にこの３つの文化遺産を概観する。

(1) フィリピンのバロック様式教会群

フィピンで最初の世界文化遺産「フィリピンのバロック様式教会群」（1993年）は、次の４つのスペイン統治時代の教会群からなる。１）ルソン島北部西部イロコス（Ilocos Nortre）州の州都ラオアグ（Laoag）の北パオアイ（Paoay）の1774年に建設されたサン・オーガスティン（St. Augustine）教会、２）南イロコス州（Ilocos Sur）サンタマリア（Sta. Maria）のヌエストラ・セニョーラ・デ・ラ・アスンシオン（Nusestra Señora dela Asuncion）教会、３）マニラの旧市街、パッシング川左岸の河口のスペイン支配時代の城塞イントロスムス（Introsumus）内にあるサン・オーガスティン（St. Augustine）教会、４）ビサヤ諸島のパナイ（Panay）島イロイロ（Iloilo）州の南部にあるサン・トマス・デ・ヴァヌュエヴァ（St. Tomas de Villanueva）。

このうち、マニラ旧市街にありフィリピン最古の教会といわれるサン・オーガスティン教会

表２　フィリピンの世界遺産とその選定基準

世界遺産の名称	種類，指定年と選定基準
トゥバタハ岩礁海中公園	自然遺産 / 1993 / vii, ix, x
プエルト・プリンセサ地底河川国立公園	自然遺産 / 1999 / vii, x
フィリピンのバロック様式教会群	文化遺産 / 1993 / ii, iv
フィリピン・コルディリェーラ山脈の棚田群	文化遺産 / 1995 / iii, iv, v / 危機遺産
古都ビガン	文化遺産 / 1999 / ii, iv

注：選定基準の番号は表１の注を参照のこと。

以外は、一般にはほとんど知られていない地方都市の教会である。このサン・オーガスティン教会はマニラの都市建設と密接に関わる。

マゼランが中部のビサヤ諸島を1521年３月に「発見」して以降、スペインのフィリピン支配の中心はビサヤ諸島のセブ島であった。冒険家ミゲロ・ロペス・レガスピにとって、金鉱や帆船が係留できる多島海の入り組んだ地形における良港を必要とした。1567年にセブ市（Ciudad）を創設し、その後、面の支配が北に拡大して1569年パナイ（Panay）へ、さらに北部の主島であるルソン島に向かい、1570年にマルケン・ディ・ゴイティを指揮官とする分隊をマニラに派遣して1571年に都市建設をした。

マニラは囲郭建設以前にも何人かの土着領主が砦を築き、500年以上にわたって中国商人や日本商人が来住して、シャム、カンボジア、ボルネオ、ベトナムなど東南アジア各地との交易を行ってきたなど港市的性格強かった。ここにスペイン人が強引に入り込み、もともとは木製であった柵を石造の堅固な城塞に改造して彼らの専住地区を作り上げた。

スペインにとってフィリピンは、新大陸のヌエバ・エスパーニャ（Nueva España）の太平洋を越えた支配の延長、アジアの海域交易拠点として目論まれた領土である。都市計画も、メキシコシティーなど新大陸でみられる、教会、広場、市役所がセットになった植民プランを踏襲している。

1584年にマニラに赴任した総督ベラジャは、延焼を防ぐため、木・竹・ニッパでの在来建築様式を禁止し、パシッグ川上流のマカティ（現在のマニラの新市街にあたる地区）の凝灰岩を利用して舟運で運び、屋根瓦がレンガで新たに製造した。Plaza Mayorといわれる核となる広場から伸びた直交する街路、威信顕示的な建物としてのカテドラル、総督府、修道院、病院、学校などをその周囲に配置した。

(2) 古都ビガン

古都ビガン（Vigan）はルソン島南イロコス州の南部にあるスペイン統治時代の面影が残る小さな都市であり、フィリピンでは最も新しい世界遺産である。ビガンはフィリピンで４番目の植民都市として1574年に建設された。ビガンに関しては山口ほか（2002）が建築学の視点から街路計測含む詳細なプランを考察した。応地（2004）は1573年のフェリーペ二世の勅令「インディアスの発見・植民・平定に関する法令」が、メキシコでの経験から、都市の選地、都市計画、街路設計、建築仕様、周辺農地配分などの指針として実践した具体例を検討した。特定の他の場所が他の場所ととりむすぶ関係性のなかで、その場所のもつ意味を探ろうとするsituationと、その場所に累積的な諸条件から特定場所のもつ意味を考えるsiteの両面から分析

した。

その結果、応地は小さな植民都市のなかに４つの機能と空間分化を伴った都市構造のセグリゲーションを指摘している。１）祭政一致の威信顕示空間としてのPlaza Salcedo、２）交易・物流機能の活動核としてのPlaza　Burogos、３）富裕商人層の職住空間としての旧市東部のグリッド･パターン地区、４）その西方にひろがる住居地区。１）はスペイン人の空間、２)・３）は中国系メスチーソの空間、４）はイロコス先住民の空間に対応する。世界文化遺産の範囲に指定されたのはこのうち、１)～３)の空間である。かつての商業中心地としての２)と３)は、この中国系メスチーソ空間と重なり合う。

ビガンの都市史を遡ると、16世紀後半の四半世紀に都市は建設されたが、その後の発展は緩慢である。1585年には北部カガヤン川河口に日本人海賊を追い出して要塞化したヌエバ・セゴビア（Nueva Segovia）が建設され、北部ルソンの司教座も1595年にここに位置することになる。ビガンにスペイン人がきわめて少ないことからも推測されるように、ビガンの初期成長は早くも頓挫する。その復活を応地は、1658年の司教座のヌエバ・セゴビアからの移転、1782年からバスコ（Basco）総督によって財政再建のために導入されたタバコ強制栽培・専売制度の導入によって、商業的農業や綿工業の中心として南北イロコス州が成長したことに求める。その集荷・広域流通を担ったのがスペイン人との混血である中国系メスチーソであった。

ビガンの世界文化遺産地区で最も観光客を引きつけ、古いスペイン風の街並みといわれるのは実はこの２)・３）の地区の中国系メスチーソの富裕な商家建築であり、決して植民都市建設当時のスペイン人居住区がそのまま現存しているのではないことは注意しなければいけない。

(3) コルディリェーラ山脈の棚田群

コルディリェーラ山脈の棚田は、1995年に登録されたフィリピンで４番目の世界遺産である。稲を2000年以上にわたり栽培し続けきて伝統的な技術が保持されている“生きている文化的景観”として評価された。

英語と仏語併記されたICOMOSの諮問委員会の指定推薦の原文（ICOMOSは以下のとおりである（英文・仏文併記。ここでは英文のみ表記、下線は筆者)[6)]。

The rice terrace of the Philippine Cordillera are outstanding examples of <u>living cultural landscapes</u> devoted to the production of one of the world's most important staple crops, rice. They preserve <u>traditional techniques</u> and forms dating back many centuries, but which are still viable today. At the same time they illustrate a remarkable degree of <u>harmony between humankind and the</u>

natural environment of great aesthetic appeal, as well as demonstrating sustainable farming systems in mountainous terrain, based on a careful use of natural resources.

人類と自然環境の調和した美を保ちつつ、山地の自然資源を活かした持続的な農法が注目されたのであった。

その指定地は次の４地区である。このなかで最も交通が便利な１）のバナウエ地区が多くの観光客集め、ここを基地として棚田村を見学することが多い。その社会は明確な首長、領主をもたないバランガイと呼ばれる親族・血族集団が中心の非双系社会である。イフガオ語（方言の変異も含めて）を母語とする人々はイフガオ州を中心に約13万人いる。

1）バナウエ（Banaue）地区: Battad and Bangaan

2）マヤオ中心（Mayoyao Central）地区

3）キアンガアン（Kiangan）地区: Nagacadan

4）フンドゥアン（Hungduan）地区

コルディリェーラ山脈の谷筋を異にするマウンテン州ボントック地区にもボントック族による見事な棚田が見られるが（合田 1989）、世界遺産登録を受けているのはイフガオ族の棚田に限られる。ボントック族も同じプロト・マレー系の双系的な水稲耕作民族であるが、集村に居住し、地床式民家、石積棚田である。村として統合がボントック族ではみられるのに対して、イフガオ族は散居、高床式民家で、家族・氏族以上の社会的集団を欠く、山地民の社会としてはより未成熟な段階にある。申請者はそこに世界遺産として形成の絶対年代は比定できないものの、伝統の相対的な古さと、現在も人びとが耕作しているという真正性を求めた。

４．イフガオ族の棚田の特性・技術と地域社会

(1) コルディリェーラ地方（Region）の成立経緯

ルソン島北部のコルディリェーラ山脈は標高2000m級の山が連なる僻遠の地であり、1964年までマウンテン州（Mountain Province）として一体感を持っていた。北カガヤン（Cagayan）州、西海岸の北イロコス（Ilocos Norte）州、南イロコス（Ilocos Sur）州、東海岸のイザベラ州に囲まれた山地の少数民族の居住地域[7]である。その下には、アパヤオ（Apayao）、カリンガ（Kalinga）、ボントック（Bontoc）、イフガオ（Ifugao）、ベンゲット（Benguet）の５つの下位行政区である準州に分かれていた。

この地に外国人が入ってきたのは遠く16世紀後半に遡る。スペインがルソン島の海岸部を掌握して、植民地経営の要として金を求めて山地奥深くに入っていったことに端を発する。北端のカガヤン川の谷を遡上してキアンガンに至る北から南へ向かうのがコンキスタドール（征服

者）のルートであった。1620年のバギオ（Bagio）、1668年のカヤン（Kayan）などの探査が行われたが、結果的には有望な金鉱山を見いだせずに、バギオ周辺への銅の採掘など以外には長らく経済的には見捨てられてきた地域である（Scott 1974：1–9）。

しかし山地少数民族間や低地民との軋轢もあり、軍事的な探検やキリスト教の布教は18世紀を通じて徐々にではあるが進んでいく。1800年には北部ルソンはイロコスとカガヤンの２つの州に形式的には分けられた（Scott 1974：231）。アメリカ合衆国は1908年に旧マウンテン州を確定、キアンガン、バナウエ、マヤオヤオ３郡を合わせたイフガオ準州を設定した（Conklin 1980）。

しかしイフガオ族という名称が歴史上出現するのは、20世紀初頭アメリカ合衆国がフィリピンを領有して以降、若い教師を各地に派遣したことに端を発する。この地区の学術研究は、ボントック地区に赴任したA.E.ジェンクス、イフガオ地域のH.O.ベイヤーなど、その後に人類学的訓練を受けた人々が調査したことに始まるという（合田 1997：15–16）。

それまでこの地域の少数民族は山地民Igorotes、あるいはMayao Ritualとして一括されていた。その山地少数民族のなかでも、もっとも単純・純粋で原初的な形態を残していたのがイフガオ族といわれる。しかし、1932年にこの地域にはすでに自動車が入るなど、変化の兆しはみられる。また、バギオ付近の銅鉱山への出稼ぎなど、農外収入の恩恵に早くから曝されていたことも事実である。

1941年の太平洋戦争勃発とともに日本軍はフィリピン全土を占領し、暴力的な日本軍政が実施された。その最後の第14方面総司令官の山下奉文（ともゆき）（1885–1946）陸軍大将が防衛戦で逃げ込んだのがイフガオ州キアンガンであり、ここで連合国に降伏した。その黄金財宝が山中に隠されているという言説（梶原 2001：135–138）[8] は現在でもフィリピン各地に流布している。

1970年代まで首狩りの慣習が残されていたという言説もまことしやかに流れ、反政府ゲリラ、新人民軍が横行する化外の地（合田 1997：33）というのが30年前のこの地のイメージでもあった。この地は毛沢東思想に傾倒した共産主義勢力の新人民軍（NPA）の活動拠点として先鋭化したため、マルコス大統領（在位 1965–1986）は自警団を村（バランガイ）単位に結成させ、武器を供与して共産化防止の拠点とした（合田 1997：138）。

1973年にマルコス大統領によるチコ川ダムの開発計画で棚田や村が水没することを知った山地民が、戒厳令布告（1976）以降、反政府・反マルコス色を鮮明にしていく。新人民軍メンバーで山地民のカトリック聖職者のコンラッド・バルウェグがコルディリェーラ民族解放軍（CPLA）を結成し、反開発独裁、先住民の権利保護などを主張して反政府ゲリラ活動を展開する。マルコスも開発独裁批判をかわす目的もあって、地方分権、文化的多元主義を重視する

政策に転換した。エドサ革命による政権崩壊後に生まれたアキノ政権でもこの分権化は推し進められ、1987年にはCPLAとの和平が成立した。

1989年10月23日の共和国法律6766号でコルディリェーラ自治区法がムスリム・ミンダナオ自治区法といっしょに成立し、大幅な予算権や自治を認めた自治地区（Cordillera Autonomous Region=CAR）の設定を1989年に約束した。ところが1990年の山地諸州での国民投票では、政府の予想に反して、自治区創出に賛成したのはイフガオ州だけであった。他の５州は手続きが曖昧で内容が骨抜きにされているとして反対した。そのため同年の大統領令220号で旧マウンテン州（Province）の一部を暫定的にコルディリェーラ行政区（Cordillera Administrative Region=CAR）として、アブラ、ベンゲット、イフガオ、カリンガ、アパヤオ、マウンテンの６州が属することになった。中心はベンゲット州のバギオ[9] である。イフガオ州は11の行政地域、175のバランガイ（村）からなる。バナウエはその１つの郡（municipality）で中心部のポブラシオン（poblacion）にホテルや土産物店、レストラン、行政機能と商業機能が集中する。ただし州都はラガウェ（Lagawe）である。

なお、1997年12月22日に共和国法律8438号で自治区が再び創出されたが、違憲性が弁護士から指摘され、翌年の国民投票で上の申し立てが支持され、98年に法案は失効した。

(2) 棚田の立地と分布

バナウエでの筆者の２回にわたる見聞や文献から棚田の生活空間を概観する。バナウエはイフガオ州の小さな町で棚田遺産観光の基地になっている。マニラから北に約440kmの標高1000～1500mの山岳地帯にある。

地質は新生代第三紀の前期～中期中新世の堆積石が広く分布し、その構成物の多くは火山性の粘土基質砂岩（wacke）とその間に貫入する頁岩やシルト岩である。これらの堆積岩は、バナウエやマヨヤオ地域の南西部の地表面に現れ、先中新統の海底に堆積した火山流がその上に覆い被さっている。さらにこの堆積層が第三紀～第四紀にかけて断続的な隆起よって複雑な地形を呈するようになった。急峻なV字谷が大部分であるが、ところどころに高原状の緩傾斜面があり、そこに大規模な棚田が分布する。また一部には抵抗性をもった火山流が接触するところではU字谷が形成され、カスプ状の小規模な棚田が見られる。棚田が集中的に分布する標高は700m～1100mである（Voggesberger 1988：12)。標高はバナウエで1300m前後、周囲の山々は2000m前後であるから、棚田のなかでは最も高い部類に属する（図２、写真１)。バナウエの中心商店街はマヨヤオへ向かう国道の両側に形成され、そこから谷へ下った斜面に一般民家が建っている。

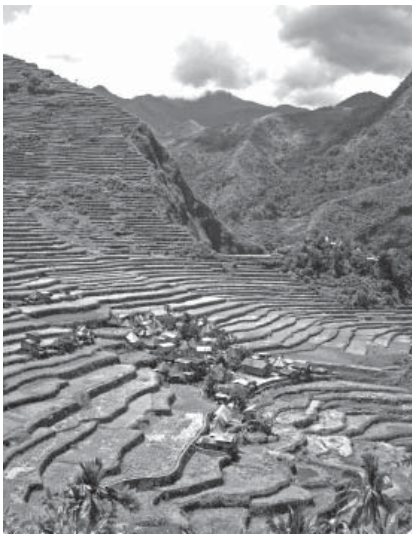

写真１　バナウエの棚田

山岳地帯ゆえ年雨量は3500mmを超え、雨季の６～９月には月降水量が500mmを記録する。雨季にはいたるところ斜面崩壊をおこし、道路が寸断される。マニラからバナウエに向かう国道ですら、道路脇には崩壊した岩石が転がっており、補修を常に行っていないと危険である。日照時間がいちばん長いのは４～５月であり、そのあとがイネの収穫時期にあたる。一つの農業集落は５戸～60戸程度の小村をなしているが、それが村落共同体としてまとまっているわけではない。また、ボントック族（合田 1989）のような大規模な集村が見られないことも、イフガオ族の村の顕著な特色である。比較的雨量が少ないのは12月～４月で、月200mm前後である。

バタッド（図２の⑧）、バンガアン（図２の⑦）という代表的な遺産ツーリズムの棚田へは

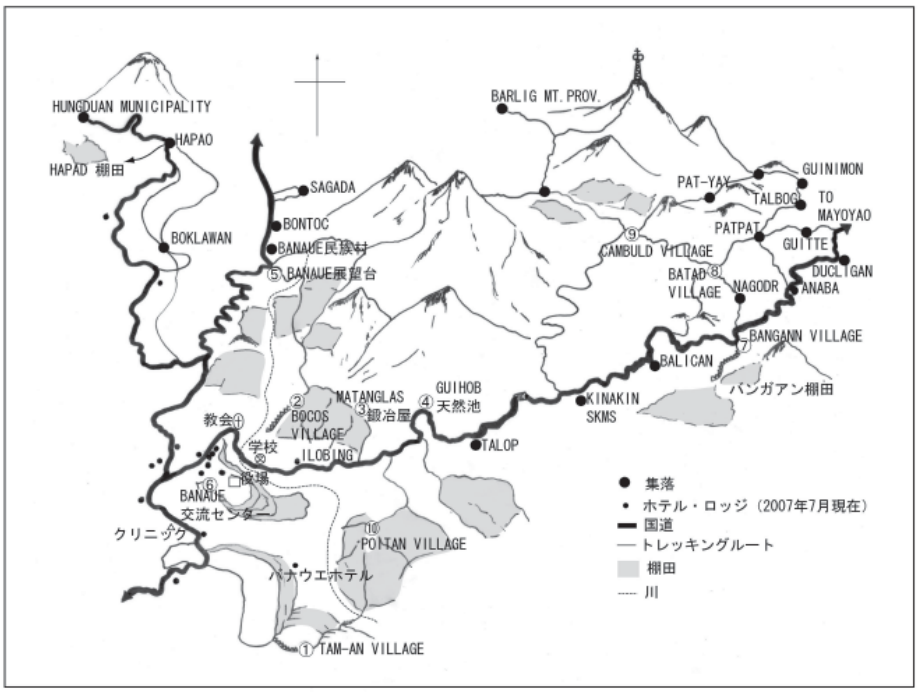

図２　バナウエの棚田と観光ルート（各種資料より筆者作成）

バナウエからは乗り合い小型バスやジプニー（中古ジープを改造した乗り物）が未舗装の国道を経由して、徒歩で山越えをする。道路整備が不十分なため、道路は雨季には不通になることも多く、公共交通では思わぬ時間がかかる。バタッドを例にとれば、バナウエの中心街から12kmにすぎないが、最後の２kmは徒歩で峠越えしなければならないため、丸１日の観光周遊コースとなっている。

イフガオ族の棚田の水田土壌は基本的には沖積土壌ではなく、加工しやすい地すべり地形の基盤岩の表面を掘削・加工するため、基盤の地質が反映した土壌である。イフガオ族では先史時代にすでに鉄を知っており、鉄製の切断・掘削・穿孔農具を所有していたと推定されているし、今世紀になって近代的な鉄製農具によってより棚田造成が容易になった（Breemen et al. 1970: 51-52）。ボントックでは多くが石積の棚田であり、傾斜勾配が８度以下の谷底で見られる。ただし急傾斜の棚田（10～45度）は土堤の棚田となっている。イフガオ族の棚田は長い年月にわたって少しずつ拡張されていき、当時の技術で可能な、最も効率よく開発可能な場所を選定したと思われる。その場所とはどのような地点であろうか。Breemenら（1970：60-66）は技術論的な観点から、棚田の拡張過程を以下のように推定している。１）主要河川沿いの谷底付近、２）少しの労力で水路を移設できる支流の谷筋、３）地すべり面である緩傾斜面、４）急傾斜面。大規模な谷筋では下部からしだいに上に向かって開田していくが、小規模な谷筋では一気に上から下まで開田する。つまり、斜面の下方の水田の形成が相対的に古い。

(3) イフガオ族の生活空間

イフガオ族の生活空間は、谷底に近い低い部分の比較的底平な地形に集落とそれを囲む屋敷地（宗教儀礼などを行う）が立地するのが一般的である。その周囲には森林、山（未耕地）、焼畑、棚田（payah）、常畑がセットになって分布する。

山（未耕地）は山地の尾根筋に残された水源涵養機能をもった狩猟地でもある。過剰な土砂流出・土壌浸食を防ぐ重要な機能を彼らも認識している。

森林（pinugo/muyong）は私有で、意図的に森林資源を人びとが利用するために保持された特別の場所でもある。家族の材木・薪やその他の採取物を得る。棚田に出来ない険しい谷筋の場所や棚田開発で残された部分が森林となっている。

焼畑（habal/uma）はサツマイモを主として作付けるが、そのほかトウモロコシ、豆類など種々の商品作物も栽培する。ここは制度的には国有地ではあるが、人々には共有と意識されている。またこの場所は水牛などの家畜の採草地でもある。焼畑休閑地はrunoといわれるイネ科草原植生（*Miscanthus sinensis*）が卓越し、屋根材料として利用されてきた。

家屋は伝統的な高床式のバレ（bale）で、炉が隅に１つある。壁は逆台形で垂直な内壁と斜めの外壁の間や天井式の物置になっている。家屋へ入るには梯子を用いる。夜には用心のためにこの梯子を外す。長子は結婚後、同一敷地内の小屋アボン（abong）に住む。近年はトタン屋根のカンポ（kanpo）のモダンな家屋が増えてきている。ICOMOSはこのトタン屋根への変化を世界遺産指定における問題点としている[10)]。

(4) 棚田の技術的構造と生産性

棚田は棚田面（terrace base)、巨大な畦畔である築堤（embankment)、土壌（soil body）からなる。棚田面は傾斜、上下棚田の間の比高、基盤岩石の強度、田面の整備状況が重要な要素となる（写真２)。上の棚田から土が崩れ落ちないで、かつ１枚の棚田面では出来る限り深い土壌を維持できる範囲で最も小さな勾配が選択される。築堤の材料は、岩石や土・粘土で、ごく稀には木と粘土がある。岩石の場合は火山起源の砂岩質巨礫や角礫の間を砂や粘土で固めたものを使用する。直径１～７cmの小さな火山性の丸石は河底からとってきて積み上げる。棚田を囲む築堤は傾斜壁と垂直壁に分類される。後者は前者よりも壁面が薄く、切石が中心である。傾斜壁は１～２層からなり、大きなもので直径20～40cmの石を積み上げる。下にいくほど大きな石となり上部は小さくなるが、隙間にはくさび状に石を充填し粘土で固める。

棚田での農作業を指揮する首長（tomona）がイフガオ社会には存在するが、彼は稲作にのみ関与し、他の作物には指揮権を行使しない。その指揮権は播種・田植・収穫の時期、田の造成、修復、用水の調整など稲作作業の全般にわたる。この存在ゆえに、棚田での個別的灌漑は認められず、伝統的な稲作の技術システムが維持されてきた。

棚田はコンクリン[11)]がpond fieldと訳したように（Conklin 1980；Guy 1995)、基本的に稲作期間中ずっと湛水され、収穫時にも水を抜くことはない。そのため長期間にわたって水をたたえた潤いのある景観を呈する。

収穫は小型ナイフで穂摘みする。田面に残った稲藁はすき込み肥料とするほか、刈り株からの発

写真２　棚田と小道の俯瞰（バナウエ）

芽を期待する。池橋（2005：114-116）は稲のルーツとして、栄養繁殖、株分けという中間項に注目し、穂を地面に置いて苗代を作る過程を想定する。伝統的なイネ[12] は160～170cmの長丈で脱粒性がほとんどなく、穂重型の、肥料にあまり反応しない収穫まで180日前後を要する品種である。味はひじょうに美味である。110日前後で収穫可能な、脱粒性で脱穀が容易な短丈の高収量品種は低地水田では栽培されるが、棚田では少なく、劣等財とみなされている。

その一方で、この伝統的品種は収穫まで膨大な労働力を必要とする。棚田では収穫時も湛水状態にあるため、穂苅した稲は天秤棒に結わえて自分の家まで運搬して乾燥する。通年湛水の理由として、彼らは畦が壊れることや虫害をあげる。栄養的には土壌の亜鉛不足を来す。筆者が訪問したときも、子どもも含めて家族が連携作業で高低差のある棚田から稲穂を運び上げ、長い道のりを徒歩で運んでいる光景にしばしば出会った。１回の重さは乾燥していないので50kgほどになるという。

棚田では、稲作のみならず、水田内での養魚や水源涵養の役割のほか、稲以外の作物（タロイモなど）も作付けられることが特色である（写真３）。また、サツモイモを稲作の後作としてここに作付けることもある。この期間のうち、７～10月は伝統的な年１作の棚田稲作の休閑期間にある。2000年以上前に稲作が導入されたといわれる。その真偽の確たる証拠はないものの、世界遺産指定に際してはその古さが強調された。そのイネより古いとされる作物がタロイモである。コンクリンは民俗分類的手法で細かく伝統的品種を分類して、農民の評価と関連づけている（Conklin　1980）。収量は１haあたり600～700kgと平地農村の約半分ときわめて低位である。コンクリンは3300kgときわめて高い値をあげているが、これは例外的な数値と思われる。タロイモは湿気を好むため棚田の畦や水田の一部に作付ける。これらのサツマイモ、タロイモに関わる農耕儀礼がイフガオ族にはほとんどない。

写真３　稲とタロイモ

逆に言うと、圧倒的な棚田の重要性は、資産や社会的地位も棚田の多寡で測られることを意味する。しかも農家の階層分化、農地の細分化を防止するため、長子が優先的に棚田を相続し、その地位を維持するために、同じレベルの

農家と婚姻関係を結び相続する棚田を均衡するような志向が働く。長子同士の幼児婚約もこの長子家族の経済的基盤の拡大に意義がある（合田 1997：55）とされる。

コンクリンの1961～63年の調査では全体の土地利用の84％が主作物である米とサツマイモで、それぞれ40％、38％（Conklin 1980）とほぼ等しい。そして籾で１年間の消費量は200～300kgである（Osman 1990）から、全体の食糧消費の約３分の１しか棚田での米作でまかなえないと推定した。他をサツマイモと低地からの購入米で補填している。

(5) 農耕儀礼と地位

しかも、棚田のかなりの部分で醸造用の糯米を栽培しており、棚田の稲作作業の節目ごとに行われる非常に多くの宗教儀礼との関連が深い。イフガオ族は汎神論者で、それごとの宗教儀礼が１年の農耕サイクルや通過儀礼なかできわめて頻繁に行われる。そこで提供されるのが自家製の醸造酒である。また、寒い冬には米の醸造酒は体を温める必需品でもある。

11～12月に播種し、１月に田植えをしたのち、ulpiといわれる感謝祭では米の地酒bayaを飲み、動物を供儀して稔り豊かな収穫を願う。６～７月が収穫時期あたる。収穫の後の８月以降は天候が不順になり、先祖へ儀礼が行われる。ほかにクリスマスも盛大に行われる。地域によっては米の二期作が行われるが、これは標高が低く、気温が上昇する地域である。この導入は1960年代であるが、後作の稲に関しての儀礼は少ない。

商品作物としては野菜と木彫人形、布などであるが、棚田で収穫した米や自家米から作った醸造酒は原則、自家消費である。イフガオ族の男たちは200km離れたマウンテン州のバギオ付近にある銅鉱山での出稼ぎ労働などで現金収入を得ているが、その現金収入は米の購入の他は、多くの儀礼用の鶏、豚、水牛などの供儀用動物（通常はこれらを食せず、米やサツモイモに特化した食事である）や塩、農具の購入に充てられる。焼畑は棚田の上部の焼畑斜面ではサツマイモが最も多く作付けられる。ほかには、タマネギ、トマト、食用籐、ショウガ、キャベツ、ビンロウヤシ、ベテル、タロイモ、マニオク、ヤムイモ、コーヒー、ワタなども栽培される。湛水しない棚田では畑作物が栽培される。

キリスト教の影響はイサベラ州では300年以上前に布教されたため顕著であるが、バナウエ周辺ではその影響は遅く、20世紀になって以降である。しかし現在では多くのイフガオ族がカトリックに改宗しており、これも伝統的な宗教行事を維持していくのに障害となっている。

イフガオ社会では儀礼位階制度、競合的儀礼制が顕著であることはこれまでも指摘され（合田 1997：53-63）、呪詛や邪術も顕著ある。二者間で富を誇示するフプラ（hupla）は、一定期間に水牛や豚、野豚、ワニなどの財を展示して豊かさを競い、それを供儀して人に振る舞い、

具体的に競争相手を想定して競う。このほか、格闘や喧嘩で競う、素潜り、薪採り、歌で競う、口争いで競う、戦闘で競うなど、じつに多くのカテゴリーが存在する。このような競争社会にはストレスや数々の嫉妬を伴う社会であるとともに、多くの儀礼を執り行うだけの経済的余裕がなければ成立しない。

棚田の所有がその経済的富の量の最も直裁的な反映である。合田は「保有棚田の量がその基礎になる。大まかに言えば、小作に出すほど棚田に余裕があるか、自作農で若干の経済的余裕が見込めれば富者、水田を持っていないか、僅かしか無く、小作や賃労働に従事しなければ貧者で、その中間の貧しい自作農ないしは兼業農民が平民である」（合田 1997：54）としている。

5．遺産ツーリズムの課題

世界遺産としてのイフガオ族の棚田は観光資源としていかなる意義を有し、現時点での遺産ツーリズムの課題は何であろうか。本章では以下の８点からこの議論を展開したい。

(1) 景観の真正性

フィリピン政府は1995年、アジアで最初の文化的景観としての世界遺産指定に動いた。マルコス大統領以来の観光振興政策もその背景にある。現地のパンフレットには「2000年の歴史をもつ棚田の不変性」が強調される。スペインの植民地化に抵抗して、先住民の労働集約性と高度の土木技術の結晶としての営為として棚田を象徴的に表舞台に引き出したといえよう。

この棚田景観は現在のイフィガオ族の人が行う稲作という生業の営みと不可分であり、真正性は明確である。しかし、指定後の2001年に危機遺産に指定されたように、棚田景観の維持に多くの解決すべき問題を抱えていることも事実である。森林伐採や地震による地形の改変や土砂崩壊、保水機能の低下、土地の乾燥化などの問題が顕著になってきた。

棚田における水不足・乾燥は、1990年代初頭以降、ミミズの大繁殖によって畦や水田壁に穴が開き、水田の表土が乾燥化してきたことに端を発する（Joshi 1998）。その防止のため、ラモス大統領は世界遺産登録を前にして、1994年にイフガオ棚田委員会（Ifugao Terrace Commission）を設置し、初めて包括的な保護対策を講じた。フィリピン大学の協力のもと、葉が殺虫作用を持つインドセダン（neem）苗をミミズ対策と植林の目的で導入している[13)]。

(2) 棚田の担い手と労働力不足

世界遺産指定では審美的な意味からの景観の真正性が求められると、棚田の放棄地があってはいけない。しかし最大の問題はこの景観を維持する担い手である。2001年には7500USドル

が政府・NGOから支出された。1950年以降にキリスト教化がこの地域で加速化し、アニミズムの儀礼はしだいに形骸化していった。豊富な棚田に関連する農耕儀礼は高齢者を中心として継承され、しだいに地域社会全体の伝承とはいえなくなってきた。自然と人間の暗黙もバランスを考慮したシステムは、この儀礼の消滅や忘却とともに、簡略化、形式化するとともに、一部はエスニック観光の目玉として、改変・強調されて催されている。観光セクターに棚田の労働力がとられ、その困苦から敬遠される労働となっている農作業、水田維持管理は、高齢化と相まってもはや精神論だけでは立ちゆかない状況にある。香ばしくイフガオの人びとが好むtinawnと呼ばれる棚田の在来品種は、収穫まで手間がかる。そのため、日常の食用には、食味は落ちるが高収量品種で安い米を市場で購入することが一般的となってきたのもその一例である。

世界遺産登録を契機として、耕作放棄地や水田耕作の労働力不足にいかに対応するか、この点では日本や韓国で実施されている棚田の直接支払制度が参考になる。日本では2000年度から農林水産省が行っているこの補助事業は、中山間地域等で農業生産、自然環境保全、保健休養、景観等、様々な面において重要な地域であるが耕作不利な条件から農業生産性が低く、農業所得・農外所得ともに低い状態となっており、しかも過疎や高齢化が著しい地域を対象とする。急傾斜地、不定形耕地、草地などが対象で、農業生産の維持を図りながら、棚田の多面的機能を確保する目的で、集落を単位として協定を結んだ場合に地目や面積に応じて補助金が支出される。棚田オーナー制度、農家滞在型休養施設、農家レストランなどの仕組みが農林水産省をバックとして整備された[14]。ただし、日本のように集落を単位とした協定は、棚田の保有格差が大きい現状では困難な面が多い。棚田の団地ごとに工夫して、棚田の管理リーダーなどを中心に試みられるべきである。いずれにせよ、人手不足が著しい現状ではある程度のコンクリート水路建設などはやむを得ない面があるが、できるだけシステムを保持し、後世に継承する仕組みが必要である。

コルディリェーラ山脈ではもちろん日本の事例がすぐには適用できないことはいうまでもない。都市住民が農業体験をする棚田オーナー制度も耕作不利地の維持に効果を持つが、交通条件が悪く、外国人観光客の訪問が中心のこの地域ではまず不可能である。政府による補助金の財源を補う意味でも、現在は無料でこの地域は入れるが、観光客はビジターセンターを必ず通るようにしてある程度の入場料をツーリストから徴収し、農業者の営農へ向けることも考えるべきであろう。各棚田の村へのトレッキングルートはほぼ一定しているので、その入り口で徴収して、これを棚田維持に振り向ける仕組みが考えられる。さらに、ホテルや土産物店など観光産業従事者に売り上げの一部を棚田保全の基金として供出させるような仕組みづくりも有効である。

(3) 宿泊・インフラ整備

毎年バナウエを訪問する人は18%増えているという推計もあるが、筆者が感じたことは、宿泊施設の劣悪さと水不足や電気の不安定性、電話、インターネット整備の遅れなどインフラに関する問題である。

2007年のイフガオ州観光局の統計[15] によると宿泊施設はバナウエ郡に20あり、そのうちバナウエの中心市街地（写真４）に11、町はずれに２（このうちの１つが国営）、村落地域に11ある。現地の本格的宿泊施設としては、フィリピン観光局（Philippine Tourism Authority）が経営する国営バナウエホテル（ドミトリータイプのユースホテルを兼営）が1980年に設立されたのが契機となる。

その地域内訳は、バタッド（Batad）に７、バンガアン（Bangaan）１、アプランガオ（Aprangao）１、ヒワング（Hiwang）１、バコス（Bacos）１である。世界遺産登録の棚田があるバタッドの宿泊施設はすべて民宿で100ペソ、国営のバナウエホテルが1500～3500ペソ、あとはツイン/ダブルで400～800ペソ（１ペソ＝約２円、2007年）で、基本的にドル払いではない。収容人員は最大のバナウエホテルで215名（うち53名はドミトリータイプのユースホテル）で、あとは20～50名までのミニホテルのみである。バナウエ市街の３カ所のホテルはレストランを兼営している。また、ほとんどの市街地のミニホテルは土産物、ツアーの紹介を行っている。現地人ガイドは、個人客の場合、このホテルでツーリストと落ち合う。

筆者の統計集計によると、市街地とその周辺での収容人員は878名で、バタッドで99、バンガアン22、アパランガ32、ヒワング25、バコス40の218名で、バナウエ郡全体で1196名となる。なる。このほか、イフガオ州にはキアンガンに８、マヨヤオ７の、フンドゥアン（Hungduan）２、ラガウェ３、その他３の23の施設があるが（ホームステイも含める）、それらを合わせても収容人員は259名であるから、全体の82%がバナウエとその周辺の棚田を有する村落にあることになる。バナウエ郡のうち150名分がバックパッカ

写真４　バナウエの中心市街地（ポブラシオン）

ー、学生用のドミトリータイプである。プールやバーを持つ施設が２、自炊施設を有するのが２施設ある。民家を模したコッテージタイプの施設がバナウエ郊外に２つあるが、いわゆる外部資本によるリゾートタイプのホテルはない。アメニティは高齢者、富裕者層には十分とは言えない。しかし、世界遺産指定で潤っているのはこれらのローカルな観光産業に従事しているイフガオの人々である。多くの農民は観光施設が消費する大量の水によって、灌漑用水の不足や棚田の荒廃に曝されているのが現実である。

とりわけ３年に１度バナウエで４月下旬に開催されるイムバヤ（Immbayah）は町あげての祭りであり、スポーツの場（熊野 2007）、スペイン語で言うところのフィエスタに変質しており、地元の有力者の肝いりで、多くの国内外から多くの観光客を集めている。

外国人観光客が最も多いのは、気候のいい３～４月である。ちょうどその時季は田植えを終えたあとの閑散期にあたり、農耕儀礼も集中する。フランス、ドイツ、イギリスをはじめヨーロッパ諸国、それにアメリカ合衆国（基地関係者などフィリピン在住者も多い）、オーストラリア、ニュージーランド、日本などからのツーリストが多いという。８月なると、雨季に入り、道路事情が悪いことと霧により棚田が見えないことも多いので観光ではオフシーズンとなる。なおバナウエでのツーリストの平均滞在日数は３日である（ガイドからの聞き取り）。

バナウエでの交通は基本的にはジプニー（Jeepney）と呼ばれる米軍ジープを改造した乗り合いバスか、トライシクル（Tricycle）と呼ばれるオートバイにサイドカーをつけた乗り物が棚田見学に用いられる（写真５）。ただし、トライシクルではバナウエ周辺の棚田へのトレッキングルートへは悪路のため無理であり、もっぱらバナウエの市街地とその周辺で利用されているにすぎない。前者は１台あたりの見学ポイントまでの運転手込みでの往復料金の相場があり、ほぼ協定料金に近い。一人では高額であるが、乗り合いの場合の場合は乗車人数で等分することになる。

写真５　バタッドを往復するツーリストを待つトライシクル

現地のツアーガイドはトレッキングの道案内と通訳が主たる任務で、協定料金がどこのホテルや現地ツーリストに紙で明示されている。１名でボントック

交差点650ペソ、バンガアン棚田600ペソ、展望所（Viewpoint）230ペソなどである。ジプニーを下車してから、棚田までかなりの比高差を徒歩で上り下りしたり、あぜ道を歩いたりすることも多く、個人観光客にとってガイドは不可欠のものである。しかし英語以外の言語をしゃべれるガイドはきわめて少ない。多くはバナウエの在住の20歳～40歳までの男子青年である。マナー、現地の知識、応急措置、英語などの講習がガイド協会によって行われ、レベルの向上に努めているが、これも公的な支援が必要な分野であろう。

(4) 道路と公共交通の劣悪性

2007年７月現在、マニラからはバナウエ（441 km）まで定期路線の直通バスは３つの民間会社が運行しているが、すべて夜にマニラを発って朝にバナウエに着く便である。復路は夕方にバナウエを発ち、早朝にマニラに着く便しかない。所要約９時間。途中の停車はないものの、サンフレスノ以降はヘアピンカーブが連続する山岳路である。雨季には道路斜面の崩壊が各所で発生するため、徐行や通行止めが頻発し快適で確実な旅にほど遠い。また、マウンテン州のボントックとの間の定期バスは2000m近い峠を越える悪路で３時間、コルディリェーラ地方の中心バギオまでは８～９時間を要する。この道路の改善と、設備の整った安全な昼便のバス運行が中高齢者ツーリストには不可欠である。

(5) 農民の現金収入源

遺産ツーリズムが農民にとってもいくばくかの現金収入をもたらしたことは確実である。その最も普遍的なものは、本来の彼らの伝統である儀礼用の木彫が、土産物として商品価値を有するようになり、欧米人好みのデザインも取り入れて、多くの村で盛んになったことである（写真６）。しかし、材料となる木材を共有地や私有林地から伐採するため、森林の荒廃、それに伴う土壌の保水機能の低下が問題となってきている。村で粗彫りしたあと、土産物店が着色

写真６　村でのイフガオの木彫り工芸

や仕上げを行う分業化もみられるようになった。

これらは土産物店に卸す以外に、棚田トレッキングに徒歩で村を訪れる観光客に、自宅の一部を改造し、新たな展示用建物を建設して、販売することも行われている。とりわけ、ポイタン村、バンガアン村、バタッド村、バノス村などでその傾向が著しい。この収入増加は伝統的手工業の隆盛をもたらしたが、労働集約的な作業のため、棚田管理がおろそかになり荒廃をまねいている側面も大きい。その一方で、棚田での過酷な労働に対しては耕作者が意欲を失ってきたことも確かである。

写真７　バナウエビューポイントと被写体となる老女（奥）

伝統的な衣装をまとったイフガオ族の高齢者たちは観光客のカメラの被写体になることでわずかの現金収入を得ている。フィリピン紙幣500ペソのデザインにもなったバナウエからボントックへ向かう展望所には、車やトライシクルが到着するたびにいくつかのグループが観光客にすり寄っていく光景を何度も見られた（写真７）。

(6) 棚田の仕組みを理解する環境教育的配慮

ツーリストが遺産観光で棚田の複雑な水・土の循環システムを理解することは、迂遠なようにみえても最終的には環境保全につながる。ひとつの地区をとって、コンピューターグラフィックなどを多用した水路網や季節ごとの土地利用の変化などを追体験できる施設やソフトがあれば、観光客のみならず、地元住民にもこの精緻な森林や焼畑を含んだ棚田システムの希少性と優秀さを理解できるであろう。環境教育はホストとゲスト双方になされるべきである。コンクリンの精緻なイフガオアトラスの成果や調査法（Conklin 1968）[16] はバナウエの私設博物館で一部は知ることが出来るが、ここを訪れるツーリストは少ない。やはり、行政としてしっかりした博物館を建設して、棚田システムを一般に知らしめる努力を行い、各見学地点には詳しい棚田の仕組みを図解した案内などの掲示板などを早急に制作するべきであろう。

現地のツアーガイドへの研修は現在も行われているが、この資格の明確化、ガイド試験の基

準などの設定も今後必要となろう。その一方で、エコツーリズムを自然の動植物の観察などに限定しないで、文化的景観の理解という側面にまで拡大して、棚田の多様な機能（養魚、野菜など稲以外の作付け）や造成・修復過程の理解にも目を向けさせる必要がある。

(7) 適正な土地利用計画の策定

年率10％以上といわれるツーリストの増加は、ホテル需要をこれからも見込める。そのため、ツーリストや観光関連産業などが使用する水の需要は今後ますます逼迫することが予想される。その一方で、棚田の水不足は、森林荒廃による保水機能の減少、ミミズ繁殖とも相まって、今後ますます深刻化する可能性が高い。農民の意向も取り入れた、行政によるバナウエ市街地も含んだ広域土地利用計画の策定が必要である。

すべての棚田を維持機能させるのは、農業人口全体の減少、とりわけ苦しい農作業をする成人男子が得られなくなっている現状ではむずかしく、選択的な保護も考慮に入れるべきであろう。コンクリンはかつて米軍の詳細な空中写真を用いて、棚田１筆１筆の所有や権利関係、水利配分などを調査し地図化して民俗地図を作成したが（Conklin 1980）、広範囲にわたって筆（ひつ）レベルまで下ろしたGIS による地図化や、リモートセンシングによる広域調査で、この貴重なデータを活用して、植生の変化や現存資源の分布、適正な土地利用計画に応用すべきである。とりわけ、コンクリンの調査の追跡、過去四半世紀における変容過程を耕地レベル、棚田ブロックごとに追うことで、ダイナミックな景観変化研究が可能となる。その際に、伝統的なリーダーによる棚田管理作業の指揮系統の把握は必須となろう。これまで、コンクリン以外にも多くの農学者が棚田の生態や構造について詳細な調査分析をしてきており（De Boef 1990; Gomez 2003; Lleva 1989; Martin 1994; Margraf 1984）、その成果の集積と普及のための資料館・博物館を兼ねたビジターセンターの建設が望まれる。

文化的景観の凍結保存はグローバル化、観光化の怒濤と棚田の担い手の高齢化のなかで、もはや理想にすぎない。現実的には棚田の仕組みや構造を記述して後代に伝える、とりわけ地元の農業高校や中等教育で継承する仕掛けが早急に必要になっている。

(8) エコツーリズムの功罪

エコツーリズムはオルタナティブ・ツーリズムの一つであるが、環境に優しいという偽善が暴かれようとしている。野生植物や動物を見るだけでなく山登り、イフガオの豊富な山野の薬草知識を逆手にとって、外資系の農産物会社や製薬会社による違法採取もみられるという。また、農民自身による、過度の森林伐採や違法伐採、採掘活動もみられる。エコツーリズムはま

さにグローバル化時代・航空機時代の隙間（niche）産業であるが、高収益を見込めるゆえに、とりわけ発展途上国の僻遠な自然が残る地域では過剰開発に陥りやすい。ますます持続可能からは遠ざかる開発が、エコツーリズムの名の下に行われようとしていることをわれわれは銘記すべきである。

「すべての天然資源は国家によって所有される」とする1995年憲法や鉱山法によって、先住民族が多く住んでいる土地の投機が始まったことも重要な問題を投げかける。鉱山開発は立ち退きを伴い、農業という生計手段を奪うため、文化・伝統の破壊にもつながる。しかも、この鉱山やダム開発の資本は大規模なアウトサイダーである。

いまだ地元の資本にとどまっている観光部門も今後大規模化し、外部者による一方的な過剰開発の恐れも十分ある。つまり、今後ますます観光化の影響は強化されることはあっても、減少することはない。その一方で、観光関連の現金収入増が見込めない地域や農家は、従来のマニラやバギオへの出稼ぎなどの一時的な移動では無く、バギオやヌエバ・ビスカヤ（Nueva Vizcaya）など隣接する南部の交通の便が相対的によい地域に移住する傾向も出てきている。途上国での過疎問題に対して、日本やヨーロッパでの過疎がたどってきた教訓を活かせる基盤も生まれてきている。

6．おわりに

以上、文化的景観として1995年に世界遺産に指定されたフィリピン・ルソン島北部のコルディリェーラ山脈の棚田群について、そこを耕作する人々を含めて、現地での遺産ツーリズムが抱える問題点を、伝統的な慣習や技術の継承が困難になってきている現状や、環境の悪化という側面もふまえて、短期の現地訪問や各種の文献から指摘し、その処方箋の提言も含めて縷々述べてきた。

エコノミー（経済性）とエコロジー（環境）はどちらも同じ語源を持つ用語であるが、高いエコロジーを確保すること、すなわち良質な環境を保持することと高い経済性を維持することは二律背反的な側面が強い。イフガオ地域では州全体の人口は減少に向かい、とりわけ日本と同じように若年層の人口流出が甚しい。かつては限界的な人口扶養力しかなかった低生産地域も、人口減少で棚田への潜在的負荷は減少している側面は指摘できる。それでもなお危機に瀕した棚田システムを維持するには、きわめて労働集約的な重労働と、システム全体を維持するための慣習や生態系バランスの保持が不可欠である。域内の食糧増産だけを考えれば、高収量品種への転換は大きな意味を持つが、農民の嗜好や伝統はそれを拒絶する。美味な在来米を儀礼用にのみ消費するだけでなく、高付加米として販売することは、環境にやさしくかつ収入増

加に繋がる。彼らは畑作物には化学肥料を用いるが、稲にはすき込んだ草を除くと無施肥であり、虫害に対しての不安が常につきまとう。この生態系の仕組みを遺産として継承するには、観光を消費するゲスト＝ツーリストや観光によって潤う第三次産業従事者に応分の負担を求めることは早急の課題であろう。

現代的な材料及び近代工法の導入が棚田の体系及び景観を微妙に脅かしつつある。棚田の石垣及や水路等をコンクリート化したため柔軟な給排水体系が持つ微妙な均衡状態が崩れてきていること、降雨及び微弱な地震にさえも予想外の影響を受けることなど、現在のイフガオ族の棚田はたいへん“脆弱なシステム”である。しかしもはやすべてを元にゆり戻すことは不可能である。水田耕作労働に基金や補助金などからかなりの有利な労賃をつけて労働力を調達し、自家労働の観光セクターへの流出を抑える仕組みが必要である。

ここでとりあげた棚田地域は交通条件の整備が遅れたその国の僻遠、周縁に位置するが、より僻遠性が高い中国雲南省の棚田（西谷 2007）では、国を挙げて国内向けの観光客誘致の積極的な動きがみられる。そこでは「農家楽」とよばれる滞在型のグリーンツーリズムを成立させ（宮崎 2006：138-150）、世界遺産登録にむけて積極的な運動を展開している。フィリピンではまだ経済的にはごくひとつかみの人々しか国内での中・長期観光を行う余力はない。公共資金が地元の一部の上層階層やガイド、地元旅行代理店、ホテル経営者など地域におけるマージナルな人々に対してのみでなく、見られる対象、本来は主役となるべきでもある農家・農村自体の持続的な開発に応分に投じられなければ、ますます域内格差は拡大するであろう。

［付記］本稿は関西大学学内共同研究「世界遺産」の研究成果であり、その研究費でもって筆者の現地視察が可能となった。ただし、２回にわたる訪問はいずれも短期であり、必ずしも観光現象との関わりは筆者の１回目の訪問では念頭になかった。そのアイディアの骨子となったのは、神奈川大学COEプログラムで話題提供した「水田の認識と多機能性の複合類型試論 ―稲作の起源と執着をめぐって―」（2006年３月16日）である。その後、関西大学の2007年度秋学期「インターファカルティ科目」として「世界の文化遺産研究最前線」で、「世界文化遺産としてのフィリピンの棚田―コルディリェーラの棚田群―」を講義する機会が与えられた。その講義内容をもとに成稿したのが本稿である。この総合科目とりまとめの労をとられた米田文孝教授に御礼申し上げる。また、最初の訪問（2006年）の後に発表の機会を与えていただいた常民文化研究所所長・佐野賢治教授にも感謝申し上げる。なお、１回目の調査は日本学術振興会科学研究費の萌芽研究（課題番号172069：代表 野間晴雄）を用いた。とりまとめに関しては2007年度基盤研究Ｂ（課題番号1950878：代表 石井英也）を使用した。

注

1）WTO資料によると、2005年、東南アジア・南アジアの旅行目的地国では、メコン流域のラオス（65％増）、カンボジア（35％増）をはじめとして、ベトナム（18％増）、フィリピン（15％増）、インド（13％増）など著しい増加を記録した。到着者数でも4200万人の増加となり、その内訳はヨーロッパ1700万

人超、アジア・太平洋地域1100万人、米州800万人、アフリカと中東各300万人で、2005年の前年比増加率は全世界で5.5％、2004年の増加率を加えると10％の高成長で、世界レベルでは観光現象のバブルの状況が現在も続いている。

2）フィルム・ツーリズムの例として、片山 恭一の青春小説『世界の中心で、愛を叫ぶ』（2001）の映画ロケ地である香川県庵治町のなんの変哲もない海辺の集落風景に若者を中心に観光客が殺到し、町内にはロケ当時のエピソードを添えた案内板やパンフレットが作成された。テレビやインターネットや口コミで心とした観光客が急増したが、こういった場合は熱の冷めるのも早い。また最近では産学連携の一環として、滞在型の文化講座や現地講座を旅行代理店と地方の大学が協同でシニア層をターゲットにして実施する文化観光／教育観光が日本でもみられ始めた。

3）バックパッカーは１日あたりの旅行単価は安いが、長期間旅行することが多いので、トータルでの支出は小さくない。ラオスのヴァンビエンなどは著名である。ここでのツアーの中心は、山地民を訪問するトレッキング、洞窟巡り、カヌーなどであるが、バックパッカーをターゲットにしたエンクレーブがラオ人部外者を中心に形成された。この地区では白人ツーリストの比率が高く、昼はのんびりとレストランでしゃべり、夜は大音響の音楽の喧噪のなかにある（横山 2008；野間 2008）。

4）ルソン島北部、コルディリェーラ山脈の東側斜面、イフガオ州に居住するプロト・マレー系の民族である。山地少数民族の多くが焼畑など粗放的、低位の段階の農耕技術しか持ち得ないのに対して、イフガオ族は、中国西南部（雲南・貴州・広東省）からベトナム北部、日本などに連なるきわめて精緻な水田造成技術をもった水稲耕作民として位置づけられる。プロト・マレー系民族の故郷は中国西南部といわれ、南シナ海のスンダ陸棚など浅海域を氷河時代に伝って渡来したと考えられている。

5）農林水産業に関連する文化的景観の保存・整備・活用に関する検討委員会の委員（肩書は任命時）は次の通りである。赤坂信（千葉大学助教授・風景計画学）、石塚克彦（劇団ふるさときゃらばん代表・劇作家／演出家）、小野佐和子（千葉大学教授・庭園デザイン学）、金田章裕（京都大学大学院教授・歴史地理学）、下村彰男（東京大学大学院教授・森林風景計画学）、千賀裕太郎（東京農工大学教授・農業土木学）、中越信和（広島大学教授・植物生態学）、中島峰広（早稲田大学教授・農業地理学）、服部英雄（九州大学大学院教授・中世史）、春山成子（東京大学大学院助教授・農業土木学）、樋口忠彦（京都大学大学院教授・景観工学）、藤本強（國學院大学教授・考古学）、吉田博宣（日本大学大学院教授・造園学）、米山淳一（財団法人日本ナショナルトラスト事業課長・遺産保存）。

6）http://whc.unesco.org/en/list/722/documents/, 2007年10月24日閲覧。

State Party: Republic of the Philippines. 1995. *Periodic Reporting Exercise on the Application of the World Heritage Convention*, *Section I*

7）フィリピン諸島各地の山岳地帯、ミンダナオ島、スル諸島、パラワン島の住民はスペインの植民地支配を免れたため、カトリックの影響を受けた中北部低地の住民とは異なる生活様式や文化を維持してきた。フィリピンでいわゆる少数民族といわれる人々は数の上では10％ほどにすぎない。多数派のタガログ族やセブアーノ族など平地キリスト教徒以外の異教徒＝モスリムであるモロ族と、精霊信仰を信じる山地民に対しての呼称である。モロ族はフィリピンのイスラム教徒を総称する名称になっているが、人種的には平地キリスト教民と同じ系統で、どちらもアウストロネシア語族に属する。つまり、フィリピンでは平地民文化、イスラム文化、山地民文化＝アニミズムの３つの文化に区分される。イフガオ族は通俗的には山地民という範疇の少数民族である。

8）梶原（2001：135-138）は、黄金伝説は元マルコス大統領の不正蓄財は山下財宝を自ら発見して手にいれたと言う釈明に見られるように、国庫からではなく他所から富を得たという尋常でない手段（不正・霊力・呪術）を用いたひとつの「民話的想像力の発露」と考える。植民地の宿命を表象している現象でもあり、フィリピン社会が抱える「富」に対するアンビヴァレンス、対他関係の逆説をも表現して

いると見る。キアンガンでは山下総司令官が降伏した9月2日を戦勝記念日としている。降伏後、山下はバギオに搬送され、軍事裁判で絞首刑となった。

9）バギオはベンゲット州の都市で、マニラからバスで6時間、北へ200km、標高1500mの熱帯高地の避暑地である。コルディリェーラ行政区の上級都市（郡に属さない）で、面積は49km²、人口は252,386人（2000年）。日本人･中国人移民によって平地からの道（ベンゲット道路）が1905年に建設され、その後、一部の人たちが定住した。アメリカ合衆国へ割譲後はアメリカ軍人らのヒルステーションとして機能したが、プランテーション農園開発はしていない。第二次世界大戦前までは夏の首都となった。現在はマニラ市場へ向けた蔬菜やイチゴ、花き栽培で著名な園芸農業地である。

10）World Heritage List No.722, 1995年の推薦原文, p.51

11）Harold C. Conklin（1926-）はアメリカ合衆国、ニューヨーク生まれの認識人類学、エスノサイエンスを確立した著名な文化人類学者で、エール大学名誉教授。カリフォルニア大学、コロンビア大学で教鞭を執った後、エール大学に長年奉職した。フィリピン、マレーシアにおける森林環境と民族学を調査。前半はミンダナオ島の焼畑民ハヌノー族の色彩分類などから出発したが、61年以降は30年以上にわたってルソン島北部のイフガオ族の長期的な継続調査を行い、膨大な収集資料・録音テープなどが残されている。空中写真からの詳細な棚田の分布、所有などは当時としてはきわめて徹底したものであった。その一部がKuippersとMcDermont（2007）の手でまとめられた。また、フィールドワークに同行したりいっしょに滞在した妻による詳細な記録も近年出版されている（Conklin 2002）。

12）棚田では現在もなお多様な在来品種が作付けられ、出穂時期の違い、イネの色（黒米、赤米、白米と分類している）、糯米・粳米、早晩稲の多様性、丈の不揃いなどが目立ち、圃場での自然交配も頻繁である。熊野（2007：89）はその理由を飢餓に対する安全策とするが、品種の雑多性が商品化（＝均質化）を阻んでいる要因でもある。

13）Malanes, Murice. 2008. Tourism killing world eighth wonder, Third world network, http://www.twnside.or.sg/title/mm-cn.htmよりダウンロード、2008年3月25日。

14）アグリツーリズムはヨーロッパのルーラルツーリズムを参照したものであるが、東アジア、とりわけ日本では、1970～80年代の農家・スキー民宿と異なり、別のコンテクストで語られる。その要諦は都市―農村交流である。自治体、第三セクター、NPO、農業集落などが核となって、いわば中山間地、限界集落の生き残りをかけた所得増加政策でもある。高齢化、過疎化がさらなる深化するなか、棚田という土地条件の劣悪地域をいかに維持していくか、その一手段として棚田オーナー制度、農家滞在型休養施設、農家レストランなどが、農水省主導で進められてきた。この補助金で、集落全体での水路・農道等の管理に係る共同作業、農業機械や施設の共同利用、集落内での農作業の受委託や転作作物の団地化等の土地利用調整、集落内での高付加価値型農業等、農業収益を上げるための取組、農作業受託等を行う担い手（認定農業者、農業生産法人等）との連携、認定農業者、農業生産法人等担い手の育成、集落や地域の農業を担う集落営農組織（特定農業法人含む）の育成などを行う。2005年からはその見直し延長がなされ、集落の将来像を明確化した5年間の活動計画を提出し、農用地保全体制の整備を必須要件としながらも、地域の実情に即した農業生産活動等の継続に向けた活動で補助額に差をつけるようになった。棚田地域ではこの補助金が積極的に活用されて、景観形成や農地の受委託が一部の地域では促進されている。

15）http://www.ifugao.gov.ph/　によりダウンロード。

16）コンクリンの熱帯生態学的研究手法は次の18である（Conklin 1965：11-12）。①語彙ファイル、②棚田造成技術、水利権と水争いになどに関する農業関連のインタビューなどの録音テープ、③棚田の造成、修理、利用、除草、作付け、火入れ、地滑り、作物や植生などに関するカラー、白黒写真、④スケッチ地図（空中写真のオーバーレイによる土地、植生界、所有界（水田1枚、水田地片）、灌漑水路、

排水路、立木間作など)、⑤住民による棚田景観、水田景観、造成作業、水路、堰き止め池、農耕儀礼などのスケッチ、⑥フィールドで使用する粘土モデル、⑦野生、栽培植物の同定サンプル1500種、⑧土壌サンプル100地点、⑨耕作地での動物サンプル、⑩植え付け、移植の間隔計測データ、⑪コドラート(方形枠)植生、雑草資料60地点、⑫集落グループの食事内容、配分、消費記録5単位1年間、⑬労働日々記録(投入、雇用、協同、病気による労働損失:詳細2単位、試験実施7単位、いずれも1年)、⑭6世代のセンサス土地所有権の移動とその図示、⑮温度、降水量測定、1962-63年は8地点、うち3地点が継続、⑯相対湿度2地点、⑰雲量と日射測定:1962-63年は8地点、うち3地点が継続、⑱ローカル灌漑システムにおける季節的水量、湛水深、灌漑棚田からの流出量。

文　献

Breemen, N. van, Oldeman, L.R. Plantinga, W.J. and Wielemaker, W.G. 1970. The Ifugao Terrace, in H. Veenman & Zonen N. V. Wageningen ed. *Aspects of Rice Growing in Asia and Americans*, Miscellaneous Papers,7 .

Conklin, Harold C. 1980.*Ethnographic atlas of Ifugao : a study of environment, culture, and society in Northern Luzon*, Yale University Press.

Conklin,Harold C. 1968. *Ifugao bibliography*. Yale University.

Conklin, Harold C. 1972. *Land use in North Central Ifugao*, New York.

Conklin, Harold C. 1965. *Photographs illustrating aspects of Central Ifugao rice cultivation*, Philippines.

Conklin, Jean M. 2002. *An Ifugao notebook*, Bloomington.

De Boef, S. Walter 1990. *Changing Ifugao agriculture : vegetables as an alternative for rice in the terraces*, Dept. of Rural Sociology of the Tropics and Subtropics, Wageningen Agricultural University.

Gomez, Romeo A. 2003. *Environmental management of the Ifugao rice terraces in Kiangan and Banaue*, *Philippines*. Los Baños, Laguna, Philippines.

Guy, Peter. 1995. *Agroecosystem analysis and rapid rural appraisal of selected sites in the Central Cordillera, Ifugao, Philippines*, Halifax, N. S. & College, Laguna: Environment and Resource Management Project.

Kuipers, Joel and McDermont Ray ed. 2007. *Harold C. Conclin; Fine Descriptions: Ethrographic and Linguistic Essays*, Monograph 56, Yale Southeast Asian Studies.

Joshi Ravindra C. 1998. *Integrated crop management knowledge, perceptions and attitudes in the Ifugao rice terraces with special reference to earthworms*, Munoz, Nueva Ecija, Philippines.

Lleva Emmanuel M. 1989. *The contributions of women in an upland rice-based ecosystem in Kiangan, Ifugao*. Los Banos, Laguna Philippines.

Margraf, J. 1984. *Biological aspects of the traditional agro-ecosystems of Ifugao*, Philippines, Witzenhausen, Germany.

Martin, Konrad. 1994. *Struktur und Nahrungsnetze aquatischer Reisfeld-Bioznosen im traditionellen System der Ifugao* (*Nord-Luzon, Philippinen*), Stuttgart, Germany.

Osman, Aart M. 1990. *Changing Ifugao agriculture : role of cultivators and agrotechnologists in developing terrace rice cultivation in the Philippines*. Wageningen, Wageningen Agricultural University.

Scott, W.H. 1974. *The Discovery of the Igrots: Spanish Contacts with the Pagans*.

石原照敏・吉兼秀夫・安福恵美子編 2002.『新しい観光地地域社会』, 古今書院.

池橋 宏 2005.『稲作の起源 イネ学から考古学への挑戦』, 講談社.

応地利明 1980，フィリピンビガン市でのフィールドノート―植民都市建設と1573年植民都市令―，立命館地理学第17号，１-19頁.
梶原景昭 2001.「山下財宝」―黄金伝説の幻惑―（大野拓司・寺田勇文編著『現代フィリピンを知るための60章』，明石書店）.
菊池京子 1974. Cognatic社会における族制と社会生活―フィリピン・キアンガン・イフガオ族の調査研究を通じて―，民族学研究38（３・４），257-293頁.
菊池京子 1979. イフガオの米つくり，季刊民族学９，62-69頁.
金田章裕 2006. 文化的景観の概念と意義，季刊まちづくり11号.
熊野 健 2007. イフガオ族における農耕儀礼と土着化したフィエスタ―儀礼的遊びの文化復興を中心に―，関西大学東西学術研究所紀要，第40輯，79-106頁.
合田 濤 1997.『イフガオ―ルソン島山地民の呪詛と変容（シリーズ・地球の人びと４）―』，弘文堂.
合田 濤 1989.『首狩りと言霊―フィリピン・ボントック族の社会構造と世界観―』，弘文堂.
宗田好文 1997. ヨーロッパのグリーンツーリズム（宮崎 猛編『グリーンツーリズムと日本の農村』，農林統計協会，67-87頁.
西谷 大 2007. 灌漑システムからみた水田稲作の多様性―雲南国境地帯のタイ，アールー，ヤオ族の棚田を事例として―，国立歴史民俗博物館研究報告第136集，335-375頁.
根木昭・根木修・垣内恵美子・大塚利昭 1999.『田園の発見とその再生―「環境文化」の創造に向けて―』，晃洋書房.
野間晴雄 2007. ゴア，マラッカ，マカオのトポス―アジアにおけるポルトガル文化遺産―，関西大学文学論集，第57巻２号，125-151頁.
野間晴雄 2008. ヴィエンチャン・ヴァンビエン・与論島―時間の旅―，まほろ第54号，14-15頁，旅の文化研究所.
バレーン．L．スミス編・三村浩史監訳 1991.『観光・リゾートの人類学―ホスト・ゲスト論でみる地域文化の対応―』，勁草書房.
春山成子編著 2004.『棚田の自然景観と文化景観』，農林統計協会.
宮崎 猛編 2006.『日本とアジアの農業・農村とグリーン・ツーリズム―地域経営/体験重視/都市農村交流―』，昭和堂.
山口潔子ほか 2002. ヴィガン（イロコス，フィリピン）の街区構成に関する考察，日本建築学会系論文集，553号，21-22頁.
横山 智 2007. 発展途上国におけるバックパッカー・エンクレーブの形成―ラオス・ヴァンヴィエン地区を事例にして―，地理学評論80（11），591-614頁.
横山秀司 2006.『観光のための環境景観学―真のグリーン・ツーリズムにむけて―』，古今書院.